

方言比較研究：広島弁・関西弁・標準語

イナムダー・アビジット

1. はじめに

日本語は数多くの人間に話される言葉である。人口の面で見ると、世界でもっとも話されている言語の中で日本語は 10 番である。外国に住んでいる日本人や日系人の人数を含め、日本の国内の人口と日本がかつて支配していた地域の住民とで、日本語を使用している人口は約 1 億 3 千万を超える。(Japanese Language, MIT 2009 年 5 月 13 日)。また、インターネット上の言語使用者数は、英語、中国語、スペイン語に次ぐ第 4 の人数である。

方言とは何であろうか。方言というのは「一国語が音韻・語彙（ごい）・語法の上でいくつかの言語集団に分かれるときの、それぞれの集団の言語体系。」と定義できる。簡単に言うと方言というのは「ある限られた地域に使われる、共通語（今後標準語と名称）とは異なる語彙・発音・語法。なまり。俚言。」江戸時代には藩、天領、寺社領などと言った統治者の領分の超えた人の往来が制限されたため各地に特徴のある方言が形成された。廃藩置県を経てもそれぞれの本来の特徴がまだ残存している。それで、日本には数多くの方言が残っている。

存在動詞「いる」と「おる」を例にとれば、その境は太平洋側ではほぼ浜名湖の東西、内陸側では長野県南部で県内を東西に横断する線の北側と南側、同県北部では岐阜県との県境を成す飛騨山脈の東西など、必ずしも言境と県境・国境が一致する地域とは言えない。

2. 日本語の方言

日本語も他の主な言語と同じように、語彙・文法・音韻・アクセントなど全ての面で地方・地域ごとの方言差（地域差）が大きいいため、異なる地方に移住や旅行したときなど、お互いに言葉が通じずに、理解できない場合もあるし、苦勞する場合も多い。大まかにみると日本語は東日本の言葉と西日本の言葉とはっきり区別をつけることができる。もちろん、北陸地方や中国地方や九州地方の方言がまた些細な点で異なるし、南北では青森の言葉（津軽弁）と沖縄県のことば（琉球弁）では相違点が非常に多く、異種の言語かと間違われる程度に異なる。

日本が開国すると、全国の発展のために全国の言葉を統一し、共通語を確立するか、日本の中心であった東京の言葉を標準語にし、全国の隅々まで普及させるかと言う方針が考えられていたが、明治時代以降、東京方言を基にし、標準語という共通語が確立され、その共通語の普及が進められた。地方の方言は全国開発に対し、障害となる可能性も高かったため、否定的に捉えられるようになった。標準語・共通語およびその基となった東京方

言に対して、その他の方言は「下品」「教養のない田舎者の言葉」「訛っている」「崩れている」「整っていない」などと否定的に偏った印象を持つようになり、現在においても、否定的に捉えられがちである。なお、ある方言に対するある方言は汚い、ある方言は上品、などの意識や偏見が存在する。

第二次世界大戦後、日本全国で「共通語」が利用されるようになり、現在、地下鉄・電車・バスやデパート・スーパーマーケットなどで使われている言語が標準語である。この70年間、標準語の使用率は以前と比べると圧倒的に増えた。2009年2月、UNESCOは、消滅しつつあるあるいは消滅の危険にある言語のリストを発表した。その中に世界中の約2500語や方言が含まれている。

日本では

- 1) アイヌ語
- 2) 与那国語
- 3) 八重山語
- 4) 宮古語
- 5) 沖縄語
- 6) 国頭語
- 7) 奄美語
- 8) 八丈語

の8つの言葉がこのリストに入っている。近畿地方では関西弁が非常に使われていると思われがちであるが、実際には関西弁の衰退も進んでいる。つまり、消滅の危険にある方言は上記の8つの言葉だけではなく全国の方言が徐々に使われなくなっているとも言えるだろう。マスコミやテレビドラマや漫画などで標準語が使われており、その影響で若い人々の中で方言を使わず、標準語を使う人は増える一方である。

そこで、若者が方言についてどう思っているか、方言が若者にとってどのような存在であるか、アンケートを通じて調査したいと考えた。一般人は特定の方言に対し、偏見を持っているのか、今までの移住の過程で以前話していた方言がどれほど変わったかもアンケートを通じて調べてみたい。しかし、まずは下記の2つの方言を取り上げ、標準語との相違点や類点を調べることにする。

- 1) 広島弁
- 2) 関西弁
- 3) 標準語（東京弁を基にした現在の共通語）

各方言がどのような特徴を持っているかとその方言の独特な単語を若干述べたい。

2.1 広島弁

広島弁は、日本の広島県で話される日本語の方言である。県西部の旧安芸国の安芸方言が今は広島弁として知られている。

備後弁は、広島県東部の備後地方で話される中国方言に含まれる方言であるが、広島県の方言は、西部の安芸地方の方言（安芸弁）と東部の備後地方の備後弁に分かれ、一般に「広島弁」とされるのは安芸弁の方である。備後弁は、安芸よりも岡山県の方言に近く、岡山弁とともに「東山陽方言」に含まれることがある。また、かつて安芸から備後北部にかけての地域を領有した浅野藩の領域と、備後南東部を領有した福山藩の領域の間でも方言の違いがある。

広島弁は、西日本方言の中では中国方言に属する。語彙・語法的に山口弁や石見弁と近く、一般的に西部中国方言に位置づけられる。瀬戸内海を挟んで向かい合う愛媛県の方言（伊予弁）とは、語のアクセントこそ異なるものの、語彙・語法面で非常に似通った面がある。

アクセント

広島弁のアクセントは東京式アクセント（乙種アクセント）である。そのため単語のアクセントでは近畿方言とは大きく異なりいわゆる標準語との共通点が多い。

発音

ア行五段動詞の連用形は、他の西日本方言と同じく「て」「た」「とる/ちよる」の前でウ音便になる

例：洗う→あろーて、言う→ゆうとる、～てしまう→～てしもーた）。また、バ行・マ行五段動詞も高齢層を中心にウ音便化する（例：飛ぶ→とーだ、飲む→のーだ）。また、サ行五段動詞は同じ条件でイ音便になる（例：出した→だいた・だあた）。

「～しよう」という意思・勧誘形は、下一段動詞では「あぎょー」（上げよう）、「でょー」（出よう）のような「～ょー」の形を取る。上一段動詞では、「みゅー」（見よう）、「おきゅー」（起きよう）のような「～ゅー」形となる。

母音の無声化はほとんど起こらない。母音「ウ」は、他の西日本と同様に、唇を左右から寄せてかなり丸めて発音する。

特定の語句に限り、サ行音がハ行音に変化している場合がある

例：行きまへん。「七」「質」は「ひち」、「敷く」は「ひく」と発音される。

連母音の発音

「アイ」連母音は「アー」になる

例：赤い→あかー 高い→たかー。

助詞の発音

格助詞の「は」や「を」は前の母音と融合して発音される（例：菓を→くすりゅう、こ

こは→こかあ)。また、引用を示す「と」は省略され、ほとんど用いない (標準語の「……と思って」は「……、思うて」となる)。例：「あんたあ、はあやる金がねえがどが一するんねえー、ゆうての」(「あなたね、もうあげるお金はないけれどどうするの」と言ってね)。

敬語

広島弁でも様々な方言敬語が用いられる。尊敬語として「-なさる」に由来する「-んさる」や、「連用形+て (+じゃ)」などがある。「て」は体言を修飾するときは「てん」になり、過去形は「てじゃった/ちやった/ちやーた」になる

[例] 町長さん、きんさったで (町長さんが来られたよ)

[例] 行ってんとき (行かれるとき)

[例] 先生がきちやったよ (先生が来られたよ)。

助詞 順接「けえ」「けん」

理由・原因を表す順接の接続助詞には、「けえ」または「けん」を用いる。もとは、古語の「けに (故に)」とされる。

[例] 今から行くけえのう (今から行くからね)

[例] 怒らんけえ、ゆうてみい。(怒らないから話してみなさい)

の

準体助詞には「の」または「ん」を用いる。例：食べよるん？ (食べているの?)、行ってん？ (行かれるの?)、寝るんが (寝るのが)

「ねえ」にあたる助詞には「のお」を用いる。

2.2 関西弁

関西弁と呼ばれているのは、関西或は大阪府京都奈良県で話されている方言のことである。近畿方言とも言われている。しかし、「関西弁」と「近畿方言」では指すものが必ずしも一致せず、例えば漠然と西日本全域の方言を包括して「関西弁」と呼ぶことさえある。近畿方言とは、近畿地方で用いられる日本語の方言の総称である。

上代から近世まで日本の中心は畿内だったため、上代は奈良盆地、平安時代以降は京都の方言が長らく中央語とされ、文語も平安時代の上流階級の京都方言を基に成立した (中古日本語)。日本語のなかで古代からほぼ連続して文献資料が残る唯一の方言であり、また文芸活動の中心地であったことから、日本語史研究・古典文学研究の上で重要な方言である。長らく都が置かれた京都では自分達の方言を中央語と自負し、他地方の方言を卑しめる風潮が形成された。中世末にポルトガルなどから来日した宣教師も、この京都方言 (御所言葉) を模範とすべき有力な日本語として扱っている (ジョアン・ロドリゲス『日本大文典』)。中世になると東国の武士勢力が畿内に進出し、その後も畿内にしばしば影響力を

及ぼした。近畿方言に東日本的な要素が若干あるのは、中世以降の東国勢力進出の歴史を反映しているからではないかともいう。

歴史が変わるのは江戸時代後期、江戸幕府政権の安定化に伴って江戸の町人文化が発展し、日本の文化・経済の中心が上方から江戸へ移行した時代である（化政文化）。江戸では町人文化の発展とともに江戸言葉が成熟し、上方・江戸の二つの有力方言が併存・拮抗する日本語史上唯一の事態が生じた。江戸言葉の勢いは止まらず、江戸時代末期には、上方周辺や西回り航路寄港地を除き、江戸言葉の優位と上方言葉の威信低下は明らかとなっていた。現代の関西と関東の方言対立意識はこうした歴史的背景から形成されたものである。滑稽本『浮世風呂』（1808）にも江戸女と上方女の言葉争いの描写がある。

（阪口篤義編『日本語講座第六巻 日本語の歴史』

（大修館書店、1990年）徳川宗賢「東西のことば争い」

発音

母音をきれいに発音し、子音を弱く発音する傾向が関西弁によく見られる。

近畿方言に特徴的な音の融合変化として、イ・ウの後ろにア・ヤ行音が続く場合、「日曜→にっちょお」「好きやねん→すっきゃねん」「カツオ→かつつお」のような促拗音化や「賑やか→にんぎゃか」「飲みよる→のんみよる」のような撥拗音化が起こることがある。

近畿方言では「脱ぎよる→ぬっぎよる」「有るぞ→あっぞ」「鉄道→てっどお」「有るやろ→あっりゃろ」など、東京方言では現われにくい濁音やラ行音前での促音の例が多数ある。

「ウ」の発音

ワ行五段動詞の連用形音便や、形容詞の連用形ではウ音便を用いる。ウ音便は、語幹末の母音によって、次のように異なる。

語幹末 a・a を o に変えて長音化。

例：こおた（買った） あこおない（赤くない）

語幹末 i・i を yu に変えて長音化。

例：ゆうとる（言っている） たのしゅうない（楽しくない）

語幹末 u・ そのまま長音化。

例：くうた（食った） うすうて（薄くて）

語幹末 o・ そのまま長音化。

例：おもおた（思った） おもおなる（重くなる）

アクセント

京阪式は東京式アクセントと違いが大きく、近畿方言らしさを印象付ける大きな要素となっている。例：あめ（雨と飴）の発音の違い

敬語

「ある」の丁寧語に「御参らす」の転「おます」があり、大阪を中心に近畿地方の広い地域で用いた。京都などでは「おはす」の転「おす」、大阪船場では「ござります」の転「ごわす・ごあす」とも使われている。用法は「ございます」と同じで、「ほんまでおます」のように「で」に付いて丁寧な断定を表したり、「よろしゅおます」（よろしいです）のように形容詞連用形に接続したりする。否定形はそれぞれ「おまへん」「おへん」「ごわへん・おわへん」になる。

「なはい」は「なさる」の転。語頭に「お」を付けることも多い。

命令表現には依然「なはる」の命令形「なはれ」や「なはい」（転じて「ない」とも）が用いられている。「ておくれ」と共に用いることが多い

例：行っとくんなはいなはれ = 行っておくれ（なさいなされ）。

京阪では相手に対してなるべく丁寧に、へりくだって表現しようとする傾向が強い。そのため、近代の商家で「さようでござりましてござります」のような敬語が多用された。

敬称の「さん」（くだけた場面では「はん」とも）も日常的に多用し、「おはようさん」「おめでとうさんです」などもよく聞かれるものである。くだけた場面では、敬称の「さん」は「はん」になる。

例：ほんださん→ほんだはん。

ねん

先述「ねや」の転で、「ね」とも言える。撥音で終わることから「ねや」より語感はやや柔らかいが、相手への自己主張の意は強くなっている。「や」との接続は「ねや」と同じ（例：ほんまやねん）だが、一部の若者達では「や」を介さず直接体言に付ける例がある（例：好きねん）。

わ

東京の女性語と同形だが、近畿方言の「わ」は下降調で男女とも多用する。

「わ」の強調表現には「わい」があり、現在は男性的な表現とされる。「な」と合わせた「わな」「わいな」もよく用いる。

2.3 標準語（共通語）

標準語と共通語は実際には異なる意味で使われているが、置き換えることも可能である。日本国内における日本語に関していうと、共通語は日本全国の人間に通じる国語のことであり、標準語は、模範（標準）となるべき正しくて正当な日本語のことである。

実際には混同して用いられることも多い。現在の日本では、方言の違いを超えて誰でも共通に理解しあえる言語使いのことを「共通語」という場合がある。例えば、青森の人と鹿児島の人がそれぞれの方言で会話しようとするとお互いを理解するのが難しいが、どち

らもよく知っている「標準語」を基本とした言葉を使えば、互いの意思疎通を簡単にすることができる。では、明確にどこが異なるかという共通語は規範・標準とされておらず、マスコミや広範な人の移動などを通じ自然に形成された言語である。標準語は異なる地方の人が会話できるために、人工的に作られた物である。

3. 方言に対する意識

木部暢子は「伝統的方言が残っていくかどうかの鍵を握っているのは若い世代ですから若い人の方言意識が重要です。」と述べている。『方言入門』(木部暢子、竹田晃子、田中ゆかり、日高水穂、三井はるみ 2013 年) この文章に非常に賛成できる。

上述した通り、関西弁特に大阪弁で、「～だから」のことは「～さかい」と言われている。しかしながら、2001 年、実際に「～さかい」を使用する人は 8.9%までに減少していた。それから、方言が衰退する傾向が日本全国で見られるので、現在においては更に減少していると予測できる。(真田 2001 年、19 頁)

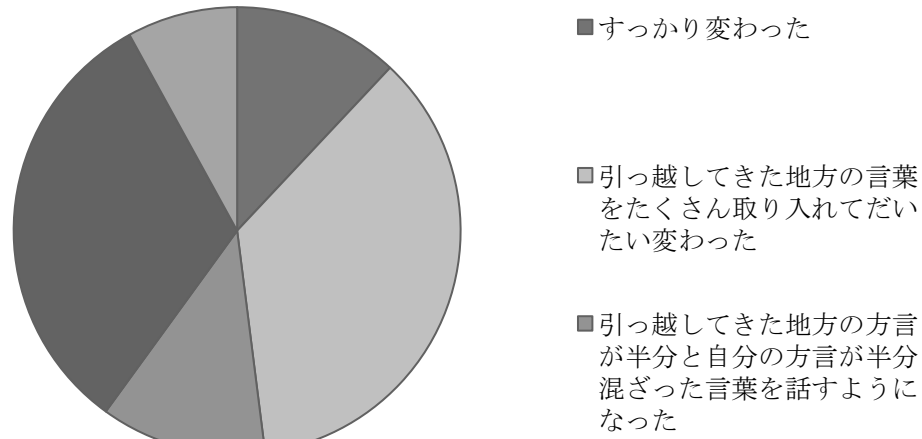
以下、今回行った「日本人の若者の方言に対する意識・意見」のアンケート調査について述べる。

3.1 調査について :

調査したかったのは東京・関東人と関西人と広島県の県民であったが、方言の一般的な調査なのでこの三つだけの地域に限らず、可能な限り他の県民の若者も対象にした。関西と関西の住民だけであると正当な結果が出なくなり、偏った結果がでる可能性が高く、幅広い地域の住民に質問した。

大阪府、東京都、広島県を始め、京都府、兵庫県、石川県、富山県、福井県、岐阜県、埼玉県、千葉県、神奈川県、山口県、島根県、熊本県、福岡県の住民の 25 人を対象に調査した。対象にした 25 人が話している方言は、標準語、関西弁、広島弁を始め、東京弁、京都弁、金沢弁、加賀弁(石川県)、福井弁、富山弁、飛騨弁(岐阜県)、備後弁、山口弁、博多弁などであった。

これまでの移住の過程であなたの方言が変化していますか



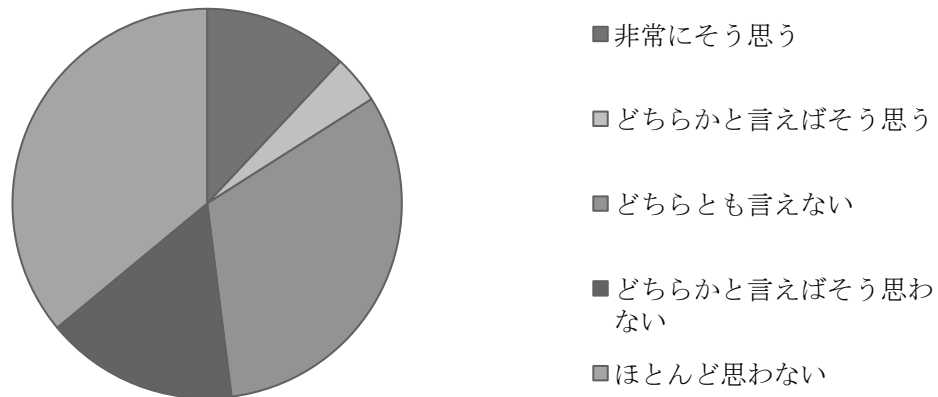
| | | |
|---|---|-----|
| すっかり変わった | 3 | 12% |
| 引っ越してきた地方の言葉をたくさん取り入れてほしい変わった | 9 | 36% |
| 引っ越してきた地方の方言が半分と自分の方言が半分混ざった言葉を話すようになった | 3 | 12% |
| 引っ越してきた地方の言葉を若干取り受けたが、基本的には変わっていない | 8 | 32% |
| 全く変わっていない | 2 | 8% |

移住・引っ越しの過程で、以前話していた方言がどれほど変わるかを知りたくて質問した。方言が完全に変わったというケースと全く変わっていないという極端なケースが少なく、20%。(完全に変わった12%、全く変わっていない8%)

半分以上変わったと回答した人は36%、新しい地域で長く住んでいてもほとんど変わっていないと回答した人は32%で、以前使っていた方言と現在使っている方言を半分ずつであると回答した人は12%であった。

ここで明確になるのは、日本人は新しい地域に引っ越して行くと8割の人の方言が変わって行くということである。

今後も他の都道府県へ移住するとき、現在話している方言を変えたいと思いますか。

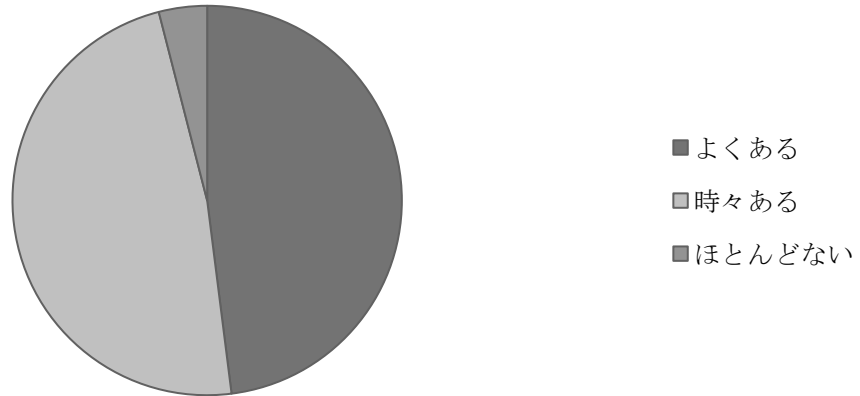


| | | |
|----------------|---|-----|
| 非常にそう思う | 3 | 12% |
| どちらかと言えばそう思う | 1 | 4% |
| どちらとも言えない | 8 | 32% |
| どちらかと言えばそう思わない | 4 | 16% |
| ほとんど思わない | 9 | 36% |

引っ越すときに方言を変えたいかと聞くと、変えたくないという回答が最も多く（52%）、変えたいという回答は16%であった。

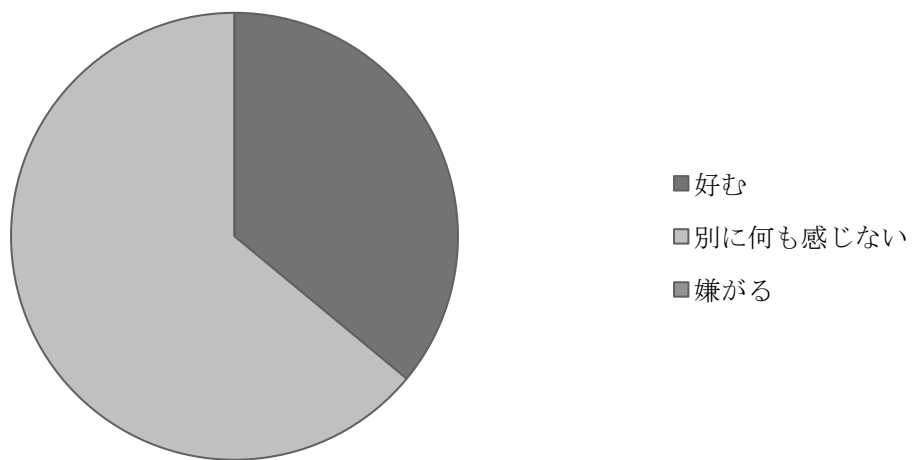
日本人の若者は自分の方言をそれほど重視していないということが分かる。自分がどこの方言を使うかよりも、コミュニケーションがとれるかとれないかを大切にしているということが分かる。

他の出身地の人と会話したとき、互いの地域の方言の話題で盛り上がったことがありますか。



| | | |
|--------|----|-----|
| よくある | 12 | 48% |
| 時々ある | 12 | 48% |
| ほとんどない | 1 | 4% |

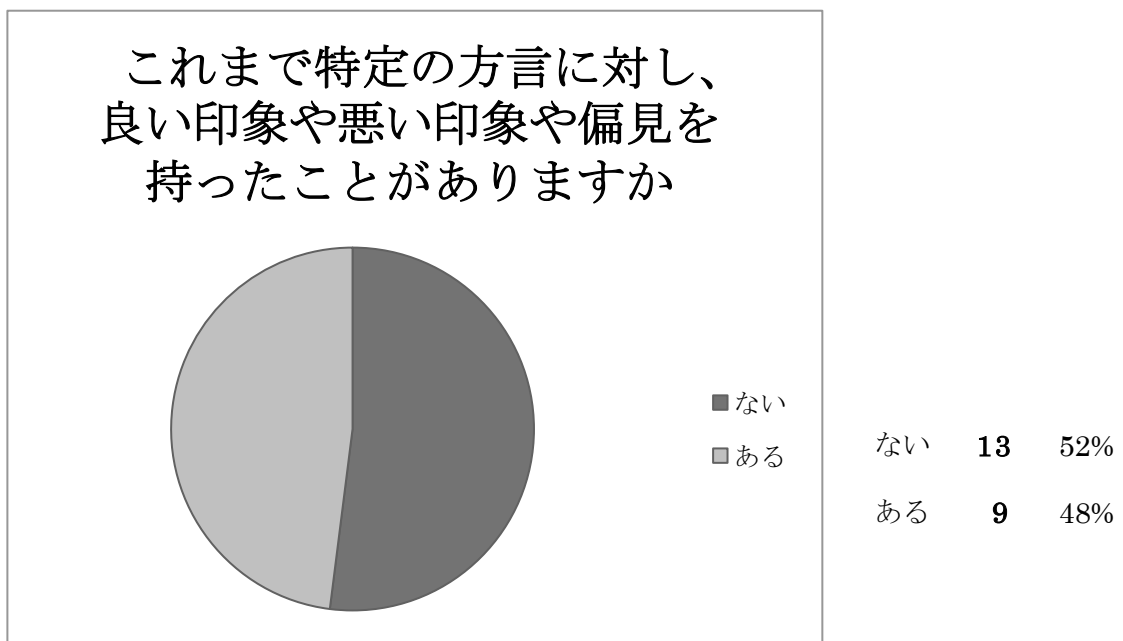
あなたは自分の方言ではない方言で話しかけられたらどう感じますか。



| | | |
|-------|---|-----|
| 1- 好む | 9 | 36% |
|-------|---|-----|

- 2- 別に何も感じない **16** 64%
- 3- 嫌がる **0** 0%

違う方言を話す人と会話するとき盛り上がることもある人は96%もいた。そして、違う方言で話しかけられて、好ましいと思う人が36%、別に何も感じないと思う人は64%であった。つまり、方言が会話を盛り上げるツールとして使われており、他の方言に対してもほとんどの若者が好意を持っていると言えるであろう。



方言に対しての偏見について知りたく、特定の方言に対して良い印象や悪い印象を持っているかと聞いた際に、52%の人が「ない」と回答し、48%の人は「持っている」と回答した。京都弁の柔らかい雰囲気の良い印象をもっているという人もいれば、大阪弁が乱暴で怖いという偏見を持っている人もいました。九州弁に対して、ゆったりした感じで癒されるという回答があった。

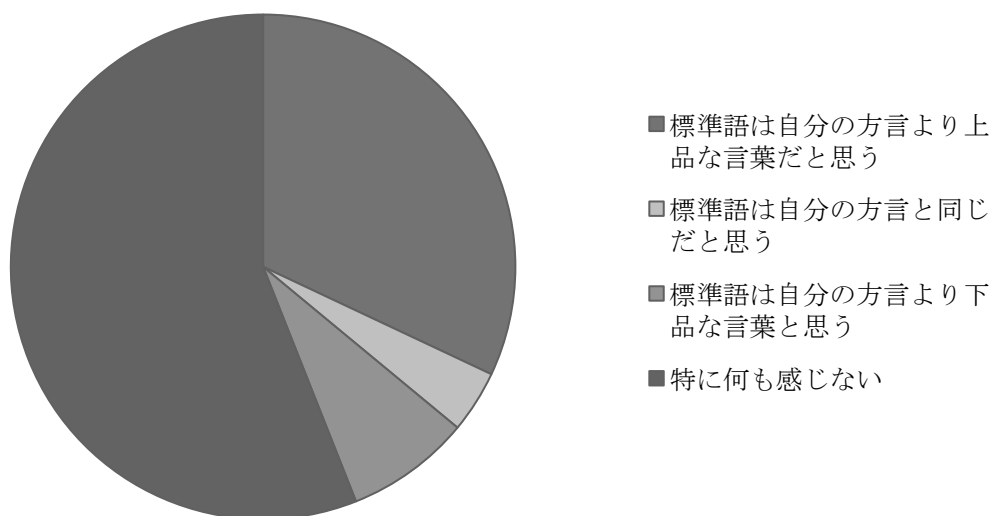
方言を使い誤解が生じたりトラブルが起こったりしたことがありますか。



| | | |
|----|----|-----|
| ない | 16 | 64% |
| ある | 5 | 36% |

方言を使って困ったことがあるかと聞くと、64%の人が「ない」と答えたが、46%の人が「ある」と回答した。例えば：福岡弁で話すと、早口で喧嘩していると誤解されたことなど。違う方言で互いに通じない、現地の人しか意味が分からない言葉が入っており、コミュニケーションの障害になることもあるものの、深刻な問題ではないということが分かった。

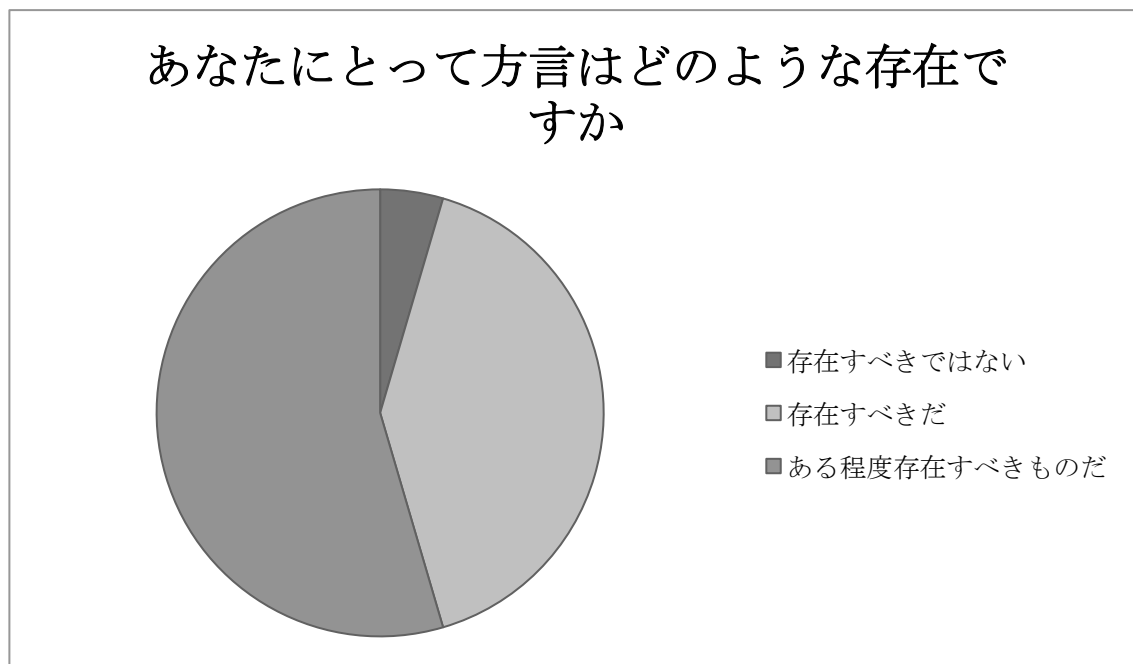
標準語にたいしてどう感じますか。



| | | |
|----------------------|----|-----|
| 標準語は自分の方言より上品な言葉だと思う | 8 | 32% |
| 標準語は自分の方言と同じだと思う | 1 | 4% |
| 標準語は自分の方言より下品な言葉と思う | 2 | 8% |
| 特に何も感じない | 14 | 56% |

標準語に対してどのような印象を持っているかと知りたく、質問した際、自分の方言よりも上品な感じがすると回答した人は32%、自分の方言より、方言と標準語が同じように聞こえると答えた人が8%、下品だと回答した人は4%（一人）いた。標準語が下品と回答した人は京都出身なので、なぜそう思うかと聞くと、昔ながらの日本の中心・京だった京都のきれいな方言を話しているから関東の標準語が下品に聞こえるのだそうである。

若者にとって、方言がどのような存在かを質問したとき、このような回答があった。



存在すべきではないと思う人が4%、存在すべきだと強く思う人が36%、ある程度存在すべきものだと回答した人が48%もいた。

4. 結論

最近日本語の方言が衰退しつつあるが、この調査を全般的に見ると現在の若者達の方言についてのイメージはどちらかというと肯定的である。義務教育では、学校内では方言を使ってはならないという指導を受けることもあるし、規則として方言を使った生徒には罰

を与えることもある。そのため、日本人は幼い頃から方言に対して悪い思いや印象を持っていると思われがちであるが、この方言調査でそうではないことが分かった。本来、自分の方言を嫌いで、わざと変えたいという日本人は非常に少ない。移住の関係で、引っ越しで行った地方の言葉を受け入れてしまい、長い期間いけば方言が自然に変わってしまうだけである。方言を使って互いの言葉にない単語などを使い、会話の内容の面白みを増やすこともある。つまり、コミュニケーションを上手にとれる一つ的手段であると言える。無論、特定の方言に対して偏見を持っていない人がいないわけではないが、それも深刻な問題になる程の偏見ではない。標準語に対し、強い好意か憎しみを感じる若者も多いと思われがちであるが、特別に何も感じないと言う人が半分以上もいて、標準とされた言葉より、若干変わった言葉に現在の若者達に関心を持っているということが言える。

明治維新以降は日本語の方言の共通かに進むにつれ、昔ながらの風習などが変質したり消滅したりしつつある。これは非常に残念なことである。昔ながらのものは大切にすべきである。地元の方言のネイティブであることを誇りに思うべきである。昔のこういう言葉の微妙な違いはそれなりの事情があって存在していた。その理由を理解した上で昔の物を守らなければならない。

5. 今後の課題

本論文では、日本語の三つの方言の相違点・類似点を明らかにし、現在の日本人の若者達の日本語の方言に対しての意識・意見に関して調査を行ったが、それで見つけ出したことを通じて日本語の方言を保護し、伝え、残す方法に関して検討したいと思う。

参考文献

1. Japanese Language, MIT 2009年5月13日
2. 中古日本語
3. ジョアン・ロドリゲス『日本大文典』
4. 滑稽本『浮世風呂』(1808)
5. 阪口篤義編『日本語講座第六巻 日本語の歴史』
6. 徳川宗賢『東西のことば争い』(大修館書店、1990年)
7. 木部暢子、竹田晃子、田中ゆかり、日高水穂、三井はるみ、『方言入学門』2013年
8. 真田 2001年、19頁
9. 庵功雄、高梨信乃、中西久実子、山田敏弘 (スリーエーネットワーク)、
『日本語のハンドブック』2000年
10. 小林隆、篠崎晃一 (ひつじ書房)『ガイドブック方言研究』2012年
11. 小林隆、篠崎晃一 (ひつじ書房)『ガイドブック方言調査』2007年